

# 子どもの心的発達に関する母親の期待

詫 摩 武 俊（東京都立大学人文学部心理学研究室）

親は子どもに対してこのように育てたいという希望をもつ。これを発達期待という、主として母親が子どもに対して抱く発達期待の内容について資料を集め、検討を加えてきた。得られた成果としては次のようなことがある。

1. 母親の年齢、学歴による差は顕著には認められなかった。地域による差もとくになかった。

2. 育児態度に関する世代差は顕著であった。回想によるものであるが老婦人が若い母親であった頃の育児観、育児態度を聞き、それと現在の若い母親のそれと比較すると明らかな差異が認められた。また、現在の母親に、自分の子どもに対する態度と、自分が幼女であったときに自分の母が自分に対する態度を比較することを求めると、子どもと接触が多いのも自分であるが、子どもにやさしく、子どもに頼られているのは自分の母親の方であると答えるものが多かった。

3. 男の子と女の子に対する発達期待の内容はかなり違っている。責任感が強く、積極的でたくましく、しっかりと自己主張をし、粘り強くあることを男の子に期待し、思いやりが深く、指示されたことを素直に守り、気持がおだやかであることを女の子に期待する親が多い。これは父親にも母親にもほぼ一様に認められる。

4. きょうだいについては兄と弟、姉と妹のあいだにそれぞれ若干の期待内容の差があった。上のものには寛容であること、下のものには活発であることが期待されている。

5. 個別的に母親に面接して、なぜそのような発達期待をもつのかと質問すると、明快に説明するものは少なかった。世の中全体の流れに同調しようとする傾向をひとりひとりがもっているようであった。

6. 小学校に入学後の学業成績の規定要因を親の援助、教師の援助、子どもの素質、運の4つにわけ、それぞれの相対的重要さを数値分配法によって求めると、現実には子どもをもつ母親は素質、

教師、母親、運という順序になるが、未婚の女性は素質と運の要因を低く評価し、親の果たす要因を高く評価している。

発達期待の研究に関して今後取り上げるべき課題としては次のような諸点がある。

1. 今回の研究はすべて意識調査の段階に止っている。ある発達期待をもつ母親が実際に行っている育児行動が、それとは違う発達期待をもつ母親の育児行動とどのように違うか、という問題が未解決のまま残されている。

これは子どものパーソナリティの発達を考える際にとくに重要である。

2. 発達期待の形成過程を明らかにすること。すなわち一人の母親がなぜ、どのようにして一定の発達期待をもつようになったかという問題である。それにはその女性の生育史、時代の風潮、夫との関係、自分自身の将来像など、多くの要因が関連していると考えられる。

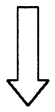
3. 上記の2の一部分でもあるが、母親のもつ発達期待は母親が一方的につくり上げたものではなく、自分の子どもがどのような子どもであると思うかによって変化するものである。母子の相互作用がここには認められる筈である。子どもをどう見るかによって母親の発達期待は変化し、この母親の側での変化がまた子どもの側に変化を支えていくものと考えられる。

4. 発達期待は、文化的社会的要因によって著しく影響されるものである。したがって現在のわが国の特徴を明らかにするために異文化間の比較研究が必要である。先進工業国との比較だけではなく、いわゆる社会主義国や発展途上国との比較も必要である。

5. さらに残された文献や記録などを通して過去のおが国の実情を調べることも取上げるべき課題である。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



親は子どもに対してこのように育て欲しいという希望をもつ。これを発達期待という、主として母親が子どもに対して抱く発達期待の内容について資料を集め、検討を加えてきた。得られた成果としては次のようなことがある。